

企業情報 > サステナビリティレポート2006 > 富士ゼロックスの“共”を考える

富士ゼロックスの“共”を考える



サステナビリティと社会のあり方

「よい社会」、あるいは「持続可能な社会」を運営するには、微妙な舵取りが必要です。一時の拡大主義のために、環境破壊や資源の枯渇を招くことによって将来の人々の可能性を台無しにしたり、逆にあまりにも慎重かつ内向きな社会の運営によって、現在に生きる人々の機会を喪失してしまったりといった極端な姿を避けるバランスの取れた判断が求められるからです。とりわけ企業の正しいあり方、つまり「企業の社会に対する責任（CSR）」に対する理解が企業自身と社会の他の構成主体によってきちんと深まっていることは重要な要素です。そうした理解を深めるためには、地球や社会のサステナビリティの問題や社会や経済の健全な発展、また、それらとの関係における企業のあり方を直接間接に考える機会を我々がより多く持つことが求められます。CSRを実践する良い企業を育てる社会全体の度量を、より豊かに、かつ強固にすることが、より良い社会、すなわちサステナブルな社会をつくるための輪を広げていく鍵だと信じています。

サステナビリティを支える“共”の精神

最近このような視点に通じる大変興味のある記事に遭遇しました。当社のパブリシティ誌“グラフィケーション”2006年の144号が特集している“コモンズ”の思想です。そのなかの「コモンズの可能性を考える」という室田 武、多辺田 政弘さんお二人の経済学者による対談から、私は非常に大きな示唆と刺激を受けました。この対談で多辺田氏は、20世紀を科学技術と官僚制が相互に作用する「総力戦システム」の時代としたのは、市場の拡大主義と国家の拡大主義、つまり“私”と“公”が歯止めを持たずに拡大しているからだ指摘します。そのうえで、かつては公と私の間であり、両者の肥大化をコントロールしていた“共”の部分が近代化の過程で解体され、結果として私と公の暴走を生み出したのではないかと、言っておられる。私なりにやや広げて解釈すると“共”とはさまざまな形で存在する“みんなのものを大切に作る心、みんなのために役立とうという精神の集合”であろうと思います。そして、その存在を大きくすることが今後のサステナビリティを左右すると思うのです。従って、市場（私）が政府（公）かの二元論ではなく、“共”がその両者の間にあって三つのバランスを保つ要の役割を果たしていたという指摘は私にとって改めてぐっと考えさせられることでした。

よい会社構想と“共”

富士ゼロックスは「強い」「やさしい」「おもしろい」を兼ね備えた“よい会社”でありたいという思いで経営されてきました。それは、“みんなのもの”を担う一員として、社会に役立つ存在でありたいという意識（共）を強く持った経営思想です。今後も国境を越えた市場競争はますます厳しくなり、そのような環境に適応できなければ企業として存続はできません。しかしその中であっても、富士ゼロックスとして社会に役立つ存在としての精神は決して失ってはならないと私は考えていますし、これからの経営陣にもそのような“共”の精神が絶えることなく引き継がれていくことを信じています。

“共”を感じ“共”を鍛える

私企業としての経済的な責任と“共”の二つの間の適度な緊張感を持続させながら変わる時代の要請に応じて両立させていくにあたって何よりも肝要なのは、理念と価値の実現に燃え続ける社内の“思い”です。逆に言えば、理念や価値観は組織の構成員が自分のものとして強い共鳴と共感を感じて初めて意味があるということです。私は社員がそうなっている状態が「おもしろい」会社であることの中核だと考えています。我々の理念と価値観が「おもしろい」の対象であり続けるために、社内の皆さんには、是非一度富士ゼロックスの“共”ということについて考えていただきたいと思ひますし、また、それに対してセンス・オブ・オーナーシップ、すなわち当事者意識を持ち行動に反映することを願っています。当サステナビリティレポートに掲載されているような“共”の精神を持った取り組みの多くは明確な当事者意識と、社会との豊かな接点を持った社員が主体的に、自律的に生み出したものです。そして、そのような姿こそが私が目指してきた経営のあり方です。

富士ゼロックスとさまざまな形で関わられている皆さんには、皆様から見て当社や社員の行動がこのような理念の沿ったものとなっているのか、そうでないのか是非厳しくご意見を賜りますよう、よろしくお願ひいたします。皆様の声が当社の“共”を鍛えるのです。当サステナビリティレポートもそのような観点からお目通しいただき、ご活用いただければ幸いです。